

読者投稿コーナー
ここ掘れかんかん!



「知ろうとする」ことの 大切さ

成嶋のり子 (なるしまのりこ)
医療法人霞水会土浦厚生病院・看護師

血統妄想のある60代の女性の大野さん(仮名)との出会いは、知ろうとしないことの残酷さを深く感じた出会いでした。

私が師長として男女混合解放病棟に異動して出会った大野さんは、楚々とした女性でした。もう30年くらい入院しています。しばらくして気づいたことは、いつもダークな色の服しか着ていないことと化粧をしていないことでした。そしてスカートは持っていません。もっと綺麗になれるのにどうしてだろうと思いました。大野さんにそのことを話してみると「嫌いなんです」とそればかりでした。もったいないくらい綺麗で素敵な女性なのです。

そんなある朝の申し送りで、「今晚も座ったままでした。どうしても横になって寝てくれません」ということが送られました。よくよく確認すると数年その状況だということがわかりました。数年夜横になって寝ていないってどういうこと?!

◎「そういう人だから」で流れていった30年

長くこの病棟に勤務している職員に確認すると「仕方がない。当たり前になっている。昼間は横になっているのでいいかと思っていた」などの答えでした。いいわけはありません。カンファレンスをしました。原因も解決策も出ません。まずは情報を集

めようということになりました。

大野さんの血統妄想は、自分が高貴な生まれであることと、宮家の名前を出しては自分との関係性を述べることです。そのことで周囲の患者様とトラブルを起こしたり生活に支障をきたしたりすることはありません。

大野さんは寝ることに話題が触れると表情が固くなり席を立てしまうことすらありました。大野さんにとって寝ることは何か嫌なことに関連しているのは間違いないと感じました。しかし突破口が見えません。

そのような時、お姉さんが面会にいらっしゃいました。初めてお会いするのでご挨拶も兼ね、現状報告と共に夜間横になれないことを伝えました。何か心当たりがないかも伺ってみました。しばらく考えてからお姉さんは涙をこぼし始めたのです。「入院してからずっとそうだったのでしょうか。今回初めて聞きました。じつはずっと話さずにきたことがあります。あの子もはっきりは言いませんでしたから……。入院する前男性に強姦されたことがあったのではと思うのです。はっきりはわかりません。でももしかしたらと思ったことがあったんです。若い頃は綺麗にしていました。仕事もしていたし男性とおつきあいをしていた時期もあったと思います。ある時からそうしなくなって、自宅に籠るようになったんです。それから入院になりました。そのことを今でも忘れていないのでしょうか。」

私もお姉さんと一緒に泣いてしまいました。大野さんはずっと自分のこころの奥底に隠して生きてきたのでしょうか。それが本当ならどんなに悔しかったことでしょうか。悲しすぎます。入院してから

〈編集室より〉あなたの「声」をお待ちしています。掲載記事に対する感想／著者への手紙／雑誌への意見・提案・取り上げてほしいテーマ・情報提供／「こんな経験をした」「読者の皆さんはどう思う？」など、なんでもOK。掲載分には医学書院特製図書カードを進呈します。実名掲載が基本ですが、匿名の場合はその旨を明記ください。

〔投稿方法〕

封書、ハガキの場合：〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 医学書院『精神看護』宛
FAXの場合：03-5804-0485 E-mailの場合：seikan@igaku-shoin.co.jp

ずっとお見舞いに来ていたお姉さんです。職員も話をする機会は山ほどあったはずですが。しかし大野さんを通り越し、時間だけが無情に過ぎていたのです。

◎横になって眠れた！

大野さんのいる病室を考えると、男女混合なので男性と女性の部屋が混在していました。大野さんの病室は廊下の一番奥で手前の方に男性部屋があります。ナースステーションからはよく見えません。おまけに大野さんのベッドは廊下側でした。お姉さんの話し通りであれば、安心して眠れるはずなどなかったでしょう。

緊急でカンファレンスをし、部屋替えを行いました。ナースステーションの前で女性部屋が2つ並んでいる病室。ベッドは窓際です。

早速大野さんに部屋替えをお願いしてみました。大野さんは快諾してくれました。私は大野さんに「今までごめんなさい。安心して眠れなかったですね。今日からは洋服を脱いで安心して眠ってください。夜間も職員は起きています。大丈夫です」と言ってみました。大野さんにどのように伝わったかはわかりません。でも大野さんは私に頭を下げてくださいました。

翌朝、夜勤の職員が興奮していました。パジャマに更衣し横になって眠っていたそうです。みんなで大喜びをしました。

お姉さんにも報告。早速お姉さんが来院されました。お姉さんとも喜びあいました。「私がずっと隠していたばかりにそういうことになっていたんですね。私もすっきりしました。肩の荷が下りた気がします」とおっしゃいました。

お姉さんとは、大野さんに綺麗になることを勧めていこうと約束をしました。これからの人生、過去に縛られず明るく生きてほしいと思いました。

もう1つ嬉しいことがありました。それはその後妄想発言がほとんどなくなったのです。もしかしたら関係していたのかもしれませんが。

◎疑問を言葉に出し続けること

疑問を解く鍵は意外なところにあります。今回は家族でした。古いカルテを読んでみることも大切です。カルテ庫に籠ってカルテを読んでいくとその患者様の人生に触れる瞬間があります。自分の知らない過去がたくさんあります。当然その中に鍵はあります。他の患者様との会話に鍵のあることもあります。日常会話の中に別の患者様のことが出てきます。その話の中に鍵がある場合も多々あります。知りたいという思いを失わなければ、どんなところからでも鍵を探し当てることはできると信じています。

大野さんの場合、長い年月の中、大野さんの夜の様子を疑問に思った職員はいたはずですが。どうにか改善できないものかと奔走した職員もいたはずですが。でも人事異動で職員は次々変わっていきます。数えきれない人事異動を繰り返す内に「疑問」は「いつもこんな感じの患者」に変わってしまったのだと思います。長くいると自分でも知らないうちに気づきのアンテナが低くなってしまっていることがあります。そうならないように注意しようと思っていても低くなりがちです。疑問を常に疑問として、答えを探し続けるようになるためにはどうしたらいいのでしょうか。

1 つは、疑問を自分の胸にしまっておかず常に言葉に出し続けることだと思っています。「何でだろう？ どうしてだと思う？」とずっと言っていると、誰かがヒントをくれるような気がします。それから新入職者です。看護学生もいます。疑問をいっぱい持っています。それらの人たちにも疑問を投げかけること。そしてその人たちの疑問にも真摯に向き合う姿勢が必要ではないかと思うのです。

一緒に考えてほしいとお願いする勇気。そして、「何もわからないうちにものを言うな！」ではなく

「知らないうちにこそたくさんものを言いましょう」とお願いする勇気が大切だと痛感します。仲間になるためのプレゼント交換だと私は思うのです。

大野さんは今どうしていらっしゃるのでしょうか。目を閉じるとスカート姿でうっすらお化粧をしている大野さんが出てきます。退職して以来お会いしていない大野さんです。きっと笑顔で毎晩ぐっすり眠っている大野さんでいると信じている私です。

精